

回顧小説

「塙塾」

釣り師・塙実の生き方

横山英昭 著



回顧小説「埴塾」釣り師・埴実の生き方

横山英昭
著

一 夫婦釣り

神奈川県は三浦半島の先端、東京湾の入り口近くに金田湾という小さな湾がある。

夏場、海水浴客でにぎわう三浦海岸沿いの道を南に下り、海へせり出す岬を一つ越えると、そこが金田湾である。

砂浜で弓なりに囲まれた湾は、北風の強い冬を除けば比較的穏やかで、キスやカレイなど季節の魚が豊富なことから、釣り人の間では格好なボート釣り場として親しまれて来た。

晴れた日に手漕ぎボートで岸を離れ、少し沖合いに出て四方を見渡せば、浦賀水道の向こうに房総半島が、三浦海岸の方向には遠く富士山が眺められて、それは絵のように美しい風景に、しばし釣りを忘れてしまうほどである。

高瀬は都会の喧噪から離れ、美しい自然の中で好きな釣りが楽しめるとあって、いつの頃からか金田湾へと通うようになった。

その湾の中程に『浜千鳥』という小さなボート屋があるが、彼はそのボート屋の常連となっていた。

ある日のこと、いつものように朝早く家を出て、品川から京浜急行に乗り、三浦海岸駅に降り立った。

駅前にはすでにボート屋の女将が車で迎えに来ていた。

「おはようさん」

女将の声が朝靄の中で響いた。

「おはよう、女将さん今日もよろしくね」

「あいよ」

釣り客たちは女将と朝の挨拶を交わすと、迎えの車に乗り込んだ。

車内にはもうすでに数人の釣り客がいた。

見るとその中に婦人が一人、釣り具を抱えて座っている。

(ホー、女性の釣り人とは珍しい)

ボート釣り場ではまだまだ女性を見かけることは少なかった。

高瀬はちよつと窮屈だが、婦人の隣に座わらせてもらうことにした。

「おはようさん。お邪魔しますよ」

「おはようございます。どうぞ」

婦人は快く席を空けてくれたが、見れば年格好は40歳半ばであろうか、赤いつばのあるゴルフ帽を深めにかぶり、ジーパンにカーデイガンという、あまり釣り場に似つかわしくない格好をしている。

(きつと店で誰かと待ち合わせでもしているのだろう)

(そうでなければ彼女は余程釣りが好きに違いない)

彼は取り留めもなく婦人のことを考えていた。

ほどなく車は店先に着いた。

すでに沢山の釣り人がいて、いざ出陣とボートの出を待っている。

先ほどの婦人は、と見ると誰かと待ち合わせをした様子もなく、男の釣り客に混じって一人で黙々と準備をしていた。

(やはり一人で来たのか。きつと釣りが好きなのだなあ)

高瀬はその婦人になんとなく興味を抱いた。

やがて彼も準備を終え、砂浜の海岸へと降りた。

婦人はすでにボートを漕ぎ出している。

それにしても一人でボートを漕ぐなんて、女性も随分と頼もしくなったものだと感じしていると彼の出番がやって来た。

ボートに乗り込むと、オールを思いきり一掻きした。

寄せる波に逆らってボートがスーッと水面を走る。

婦人の漕いで行つた方向へと舟先が向いた。

彼も釣りには多少とも自信のある方だから、婦人の釣れ具合なども遠目で見たい衝動に駆られ、婦人が錨を降ろすのを見計らつて近くに錨を降ろした。

風もなく絶好の釣り日和で、湾内にはすでに数多くのボートが浮かんでいて、思い思いに釣り糸を垂れている。

見ると婦人は手際よく釣竿を組み立て、手慣れた手つきで釣り始めた。彼も追つて釣り糸を垂れた。

それから半時ほど経つて、高瀬のクーラーには小振りながら銀色のキスが数匹泳いでいた。

ふと婦人の方を見ると、竿が立つて今にも魚を取り入れるところである。

彼は、しばし婦人の仕草を見ていたが、そのしなやかな竿捌きといい、背筋をピンと伸ばした姿勢といい、どことなく普通の釣り人になく、優雅でさえある。

(あの婦人はただ者ではないな)

それから高瀬の視線はずつとその婦人に向けられた。

太陽は次第に頭上に登り、時計が丁度十二時を回った頃、婦人は竿を畳むと錨を上げた。

石の錨は重く、細い女手では容易に上がらないものだが、それも要領よく持ち揚げると、オールを巧みに操って岸边へと戻って行った。

高瀬もその婦人の後を追うように早めに陸に上がったが、もうそこには婦人の姿は無かった。

不思議な光景を見た気がして、彼はボート屋の女将にそつと訊いた。

「先ほどのご婦人、あまり見かけないね？」
すると女将が言った。

「昔は旦那さんとよくいらしたわね」

「ご主人と？」

「でも本当に旦那さんかどうか判らないけど……」

「……………」

「お二人はいつも一緒にボートに乗って、仲良く釣っていたわね」

「あのご婦人は見たところ釣りが上手のようだが……」

「そうなのよ。お二人はいつも小さなクーラーを二つ持って行って、釣った魚を別々に入れ、戻って来ては比べるの。すると奥さんの方がご主人よりも多い日があったりして、おかしかったわね」

女将は思い出したように一人で笑った。

「そうそう、あのお二人が釣ったカレイ、そこにあるわ」

「何処に？」

「魚拓よ…、魚拓」

「……………」

「そのガラス戸に貼って有るでしょ」

高瀬は女将の指差すガラス戸を見た。

そこには釣り客が記念に残していった魚拓が貼られていて、中に大きなカレイの魚拓が二枚並んでいた。

「もう何年前になるかしらねえ。それも同じ日に釣ったのだからねえ…。その大きい方が旦那さんで、小さいのが奥さんのかわ」

「小さくたって四十一センチと書いてあるよ」

「とにかく彼女は上手みたいね。女手でそれだけ大きいカレイはなかなか揚げられないものよ」

高瀬は魚拓にある釣り人の名前を見た。

大きい方には四谷一郎、小さい方には四谷夏呼と墨で書かれていた。

「それで最近はご一緒に来られないの？」

「旦那さんはもう二年ぐらい見かけないわね。どこか外国へ行ったと聞いたことがあるけどね。奥さんも久しぶりにお一人で来られたわね」

「お住まいは何処なのだろう？」

「船帳にはいつも新宿って書いてあったわね」

「そう。新宿からではここまで来るのも大変だね」

「確か奥さんは新宿で小料理屋をしている、って言っていたわ」

「小料理屋を？」

「歌舞伎町って言うのかしら。飲み屋さん一杯あるところだって」

「とすると、その男性はご主人では無いかもね」

「そうかねえ。…」

「……………女釣り師か」

高瀬は帰りの電車の中でも、その婦人のことが忘れられなかった。

あの婦人はなぜ釣りをするようになったのだろうか。

それもどうしてあれほどの腕前になれたのだろうか。

また一人で釣りをするようになった裏には、海の向こうに消えたという男が、どんな関わりを持っているのだろうか。

多少とも物書きをする高瀬は、秘密めいたあの釣り好きな婦人について、もっと知りたいと思うようになった。

一一 起業者への道

四谷一郎は太平洋戦争のさなか昭和17年に東京で生まれた。

戦争が激しくなり、生まれて間もなく両親に連れられ静岡県浜松市に疎開している。

その浜松には日本軍の空軍基地があった為、終戦を前に米軍の艦砲射撃にあい、市内が火の海となった。

父親に抱きかかえられ防空壕に逃げ込む。

その一瞬、真っ赤に燃える夜空が目に入った。

例えようの無い黒ずんだ血の色の赤である。

静脈血のような赤の記憶は、当時まだ3歳だった彼の脳裏に、唯一の戦争体験として深く刻み込まれたのである。

それは、この世には抵抗できない何かが存在している、という脅迫観念である。自由や幸福な記憶でなく、戦争というのは幼児にはあまりに過酷である。

そもそも戦争体験が記憶の始まりなど云うこと自体、悲しい人生の定めである。

親や周囲の愛に囲まれていたとしても、それとは関係しない不幸の類である。

よって己にしか説明できない価値観を持ち始めても不思議はない。

事実、四谷は誰もがするであろう道を歩こうとしない。

これではいけない、と決めつけることもしない。

出来たらいいが、出来なければこっちでもいい、とひとつ事に深刻にならないのである。

例えば東大を出て出世したい、とも思わないから、競争社会を意識したことはない。

ただひたすら自分がやりたいことをコツコツとやっていく。

こんな彼が成長するのを、周りのものがどう思っていたかを知る中学生時代のエピソードがある。

ある日のこと、学校の生徒会長の選挙があり、彼も候補者の一人に選ばれた。普通、こんな名誉なことはないと喜びを感じて一生懸命選挙活動をするだろう。ところが彼はそれをしようとしないうばかりか、他の候補の応援をしてしまう。自分が推挙されたらその時は頑張るが、推挙されることに努力はしない。こんな具合だから、生徒仲間も彼を推してよいのか戸惑い、結局落選してしま

う。
それでも彼は悔しいと感じないのである。

競争社会では彼は生きられないし、また敢えて競争社会に身を置こうとはしないのである。

これを単に性格からくるものとするのは簡単だが、それだけでは後に見せた執念とも言える生き様を読み解くことはできない。

浜松の高等学校の卒業を前に、彼は大学進路の選択に真剣に迷ってしま

う。彼はまだ学生間で馴染みの薄いコンピュータ理論に関心を抱いていた。

0と1だけのデジタルが社会を根底から変える予感、青年四谷の生きる時代を混沌とさせ始めていたのである。

一方で戦後の物の無い時代だから、廃物を利用し家具や身の回りのものを作っては家族を喜ばせた。

台風で家の塀が大きく壊れると、翌日にはそれを直して見せた。

将来は建築家になりたいと周囲に夢を語ったこともあった。

アナログの建築とデジタルのコンピュータが、ほぼ同じウエイトで四谷の関心を二分する。

どちらもやってみたい、と思うがそれは叶わないのである。

そこで彼の選んだ進路は極めて現実的なものだった。

東京の大学の建築を受験し、落ちたら静岡の大学の電子工学を受ける。

静岡の大学には日本で最初にテレビを作った高柳健次郎博士がおられ、彼は博士の講演を聴き、憧れてもいた。

出来たらいいが、出来なければこっちでもいい。

浪人してまでやることではない。

運命を切り開くのではなく、運命に身を任せる彼独自の人生観は、間違いなく幼児期の戦争体験から始まっていたと、彼は感じ出していた。

結果は東今日の大学の建築学科に進むが、その後もコンピュータへの思いを断つことが出来ない彼は建築計画を専攻する。

コンピュータを使った建築設計が彼の生涯の研究テーマとなって行ったのである。

浜松市と言えば、戦後の日本の復興に寄与した本田やヤマハを排出している。

「やらまいか」精神と呼ばれるように、何にでも挑戦する真摯の気性の富んだ土地柄で、子供時代をこの地で過ごした四谷も、多分にその刺激を受けていた。

電気技師の父親の影響も大きかったようだ。

父親の勤めていた会社は東京無線という軍需産業だったことから、敗戦後直ちに解体され、父は職を失う。

父親は家族を養うためにラジオの修理店などをして食いつないだ。

当時のラジオは真空管でよく壊れたからしばらく仕事はあったのだろうが、次第にそれもなくなったようだ。

四谷は、父親がサラリーマンになっても長続きしないのは、使われることの理不尽さに我慢ならないと理解していた。

寄らば大樹の陰でなくとも、その気ならなんとか生きていけるものだ父の背中で学んでいたのだ。

長男四谷にはすでに二人の弟と妹一人が居り、家庭の経済は最悪の状態にあったが両親は子供たちの教育を惜しむことはなかった。

中学生になると両親は彼を塾に通わせた。

家計が苦しいのを知っている彼が、自ら望むことなどはしない。

浜松には、スパルタ教育で知られた県内でも評判の学習塾がある。

英語と数学だけを教えるのだが、子供だけでなく親も面接し、気に入らなければ入塾させない。

当時四谷の家庭は、パチンコの機械を製造し、大宮や名古屋に出荷していた。

その仕事を父親が辞めないなら入塾させることは出来ないと言前払いにあう。

その時の父親の、近々辞めます、とキツパリした返事が四谷を驚かした。

その後の父は塾長の尽力で、市内の中堅会社に勤務することとなり、彼四谷は6年間塾通いすることとなった。

塾での、とりわけ算数の勉強ぶりは熱心で、多くの塾生が脱落する中、最後まで通い切った。

大学に進むと建築を学ぶ傍ら、コンピュータに異常な関心を抱き始める。

その頃四谷に恋人ができた。

浜松での幼な馴染で、二人が好きあっているのを両家の両親が知り、四谷が卒業したら一緒にさせよう、と婚約させた。

その後一年ばかりは東京と浜松を行き来したが、突然先方の親御さんから、四谷家に婚約破棄の申し入れがあった。

理由は明かされぬまま、この縁談はなかったことになり、四谷は初めての失恋をあじわう。

自分に落ち度があるとすれば、どこか心の高まりに欠けていたのではないだろうかと自省する。

一人の娘が結婚を決意するには、それなりの覚悟がいるだろう。

親が決めたからと云うのでは済まない。6

娘が本当に四谷を愛していたのか、自問自答の末の決意だったのかもしれない。

それに四谷自身、あまり女に好かれるタイプではない、という自覚もあって、心の整理は比較的早くに着いたが、あの戦争体験がここでも彼の慰めとなり、しばし孤独な日々をおくった。

大学を卒業すると東京の大手建設会社の建築設計部に入社した。

その時のエピソードもまた彼らしい。

当時彼の通う大学の建築の卒業生には就職試験はなかった。

ただ面接はあると聞いていた。

40数名しかいない卒業生仲間は、好きな就職先が選べるから、目立って面接を受けに行くこともない。

彼もクラス生数名と大手建設会社の面接に行ってみようと約束していた。

ところがたまたま彼は風邪をこじらし、一週間日吉の下宿に寝込んでいて、面接の日を知らなかった。

風邪も癒えたので今日は大学まで登校しようとした日のこと、日吉の駅で級友にバッタリ出会う。

「おい、四谷。今日、面接だぞ」

級友は四谷の下宿まで、突然決まった面接を知らせにきてくれたのだった。

もしホームで2人が偶然出会えなければ、四谷はこの会社に就職していない。彼のその後の人生は大きく変わっていった筈である。

就職して3年後、彼は学生時代のバイト先に勤務していた女性と結婚し、2人の男の子の父親になった。

その長男が生まれた日に、四谷は意を決して会社に辞表を出し、周囲が止めるのも聞かずに退職している。

「子供が生まれると、安定した暮らしが優先になるだろう。自分が本当にやりたいコンピュータ建築ができなくなり、人生に悔いを残すことになる。生まれてくる子供にそんな親の姿を見せたくない」

彼は出産で入院している妻にそう告げると、彼女は笑顔で言った。

「分かっています」

会社を辞めると中野駅近くのマンションのペントハウスを借り、設計事務所を開いた。

まずは家族を養わなければいけない。

一方、コンピュータ建築の研究には、最低限の設備があるがもとより資金はない。

パソコンはまだこの世にない。

彼は当時ようやく実用化されたタイムシェアサービスを利用するため日本IBMを訪れた。

大型で高性能なコンピュータを、電話回線を通じて事務所で使いプログラムを開発する。

四谷には既にプログラムやコンピュータを操作する技術はあるが、いざ実用システムを作るとなると容易ではなかった。

四谷は設計事務所などやっつけてはやりたいことができない。
だからと言って事務所を止めれば生計はどうなる。

苦しい日々が続く。

そんなある日、建設中の工事会社が、今日倒産するという情報が四谷の事務所に届いた。

それも計画的らしい。

建築主から上棟工事費をもらおうと工事半ばで現場を放棄した。

生コン会社が倒産を察知して生コン車を止めに入った。

このままでは工事がストップしてしまう。

待った無しの状況に、四谷は決断する。

「僕が責任持ちますから、最後まで生コンを送ってください」

こうして棟上が辛うじて出来た。

しかし棟上までの予算は、請負業者がすでに持って行って仕舞い、残りは少ない。

残る予算で完成させるにはどうしたらいいか。

もちろん請負業者の尻拭いをする責任は彼にない。

だが完成しない建物が残ることは、建築事務所としてあまりに辛い。

彼の建築家としての職能が根底から崩れるのである。

四谷は事務所をたたみ、現場に入り、自分が完成させることを決意する。

こうして建物は無事完成し、四谷はコンピュータ建築専門の研究所を設立した。倒産現場に入り、自ら建物を完成させた体験は、その後の彼の人生を大きく変えるきっかけとなる。

事実、彼は共同でマンションを建設するコーポラティブハウス運動を提唱し、自らも友人建築家と手作りマンション「OHP 301」を完成させた。

そのニュースはマスコミで大きく報道され、その後のコーポラティブハウス運動の先駆けとなった。

三二 ベンチャー会社の誕生

四谷のコンピュータ建築が注目を集めだしたのは、この世にパソコンが誕生した1980年代の初めである。

彼は秋葉原に行きマイクロコンピュータを体験すると、マイコン搭載のコンピュータに自分で開発した建築ソフトウェアを載せ、ソフトプラスハードのビジネスを構想して新会社を設立した。

彼の構想は、将来建築家ロボットを開発する事であった。

彼がプログラムを作るときには常にロボットを意識し、語り掛けるように夜遅くまでプログラミングに熱中した。

彼はプログラムにHALと名付けた。

英国の小説家アーサー・C・クラークのSF小説「2001年宇宙の旅」に出てくる人工知能ロボットの名が好きだったに過ぎない。

彼はHALのように感情を持つロボットがいずれ人間の建築家に代わって設計する時代が来るだろうと予想したが、それがいつ来るのかはさすがの彼も想像できなかった。

それにしても彼にはまとまった資金も機材もない。

どうしても会社を興し収入を得なければならぬ。

それには自分で開発したソフトを製品化すること以外にない。

彼の研究所を軸に数社を統合し、本社を渋谷道玄坂に移した。

彼は設計技師として学んだ建築技術やアイデアをソフトに生かして販売し、会社の基礎をつくった。

彼の会社はすぐに社員が数十名を越し、なお大きくなろうとしていた。

ベンチャービジネスブームに乗って、多くの資本が集まりはじめ、誰の目にも成
功への道を順調に歩んでいくように思われた。

彼の発想と技術で生まれ育った会社だが、役員や社員が増え、事業所が広がって
いくと、彼の技術よりもむしろ経営そのものが重視されるようになった。

事業は拡大の一途を辿り、大企業や資本家の投資の対象となつて、ベンチャー企
業はひたすら株式の上場へ向けて走り始めた。

中でも大阪に本社のある大手資本は積極的に彼の会社に投資し、経理担当役員を
送り込んできた。

全国に支店や営業所が増え、大手資本の販売網とのタイアップが広がった。
こうなると社長の四谷の思い通りにいかなくなる。

四谷は、自分は起業家ではあるが企業家ではないと知っていた。
彼は金儲けや会社を大きくすることが面白いと思つたことは一度もなかった。

むしろ経営者としての責任や精神的負担が増すことは、彼の自由な発想の妨げと
なり、彼の人生にかえてマイナスとさえ考えていた。

彼は役員たちとの意見が合わなくなつていた。

役員たちは、社長の発想は五年は進みすぎると暗に批判した。

四谷は、だから会社の今日も未来もあるのではないかと反論するが理解されない。

それでも経営規模が大きくなった今、当然の事ながら経営トップは役員たちの意見にも従わなければならない。

自分で創った会社なのだから納得行くようにすれば良いのだが、百人もの社員を抱える会社にもなると、社長個人の思いだけで事は進まない。

四谷は社員やその家族の生活を考えると、いつまでも自分が社長であり続けることが本当によいのか疑問を感じた。

だが会社をそこまでにした社長を、理由もなく周囲が辞めさせるはずもなかった。

四谷は人知れず悩んでいた。

ベンチャービジネスとは文字どおり冒険であった。

勝ち負けのある戦いである。

成長の裏ではなにかの無理もしなければならぬ。

家庭のことなど考えるゆとりさえ無かった。

だが彼はもう、元に戻ることは許されなかった。

どこまでも自分を殺して耐えなければならなかった。

自分が自分でない毎日を送っている不安と焦燥感の中で、彼は自分との戦いにも疲れ切っていた。

そんな孤独な社長業に疲れ果てた彼が、二十年ぶりに夏呼と再会する。

四谷が藤夏呼と初めて出会ったのは、彼が大学を出て大手建設会社に勤め、設計技師をしていた遠く若き時代であった。

夏呼は高校を終えると東京に出て、昼間、服飾専門学校に通う傍ら、夜はクラブでアルバイトをしている勤勉で愛らしい娘であった。

今も新宿にある小さな田舎料理屋で顔を合わせたのがきっかけで二人は親しくなり、四谷は夏呼のクラブにもよく通うようになった。

その夏呼が、四谷に告げずに突然消息を絶った。

店のママに訊ねても明かさそうとはしない。

風の噂では夏呼は結婚したようだと言われた。

四谷が昔夏呼と会った田舎料理屋へ行くのは久しぶりであった。

そこで店のママから、夏呼が新宿に帰ってきてきて小料理屋を開くと聞く。

彼は懐かしさから夏呼に会いたいと思った。

夏呼の店の開店の日、四谷は店を訪れ、夏呼を驚かせた。

夏呼はそれまで色々と苦勞をしてきたのだろう、すっかりやつれて見えるが、娘時代の面影は今なお残っていた。

夏呼もまた四谷に会って急に昔の記憶が蘇り、あれからの人生の紆余曲折も嘘のように消えて、彼が誰よりも身近に感じられるようになった。

四谷と夏呼は次第に心の内を明かし合うようになった。

夏呼は四谷の仕事の悩みも聞いてあげた。

四谷もまた、娘時代から今にいたる夏呼の二十年の空白を色々と聞いてあげた。

夏呼は四谷に、わたし芸者さんになりたかったの、と言った。

一度は家庭の奥さんにおさまったものの、やくざな夫の不祥事で別れることになり、再び水商売に戻って来たという。

茨城の実家がそれほど苦しいわけでもない。

姉と妹がきちつと嫁いでいるのに、自分にはなぜか水商売が合うらしい、と夏呼は四谷に笑いながら言った。

ごく普通の女の幸せからはほど遠い人生を、夏呼は自ら選んで生きているように四谷には思えた。

こうして男と女の生き様の違いを知る中で四谷は一瞬でも孤独を癒すことが出来た。

そんな二人が再び親しくなるのはごく自然であった。

四谷が自宅を空けるようになったのもその頃で、当時杉並の井荻にあった夏呼のアパートには、彼の姿が時折見られるようになった。

やがて四谷の周辺は騒がしくなった。

身内も役員も将来ある会社の社長の女性問題が株主や世間に知れるのを恐れ、夏呼のところへ四谷と別れてほしい、と談判に及んだ。

もとより四谷は家庭を捨てたり、会社を捨てる気持ちは無かった。

だが会社が大事ではないのか、社長の立場を忘れたのか、人の道に反するではないか、と言われて彼は社長である前に一人の人間なのだ、と声を大きくして言いたかった。

彼は今しばらく一人にさせてくれ、と心の内で叫んだ。

しかし周囲の非難や中傷が彼の心に重くのしかかり、ますます彼を深い孤独へと追い込んでいった。

社長などはいつ辞めても良い。

ただ人間らしく自分の心に従って生きていきたい。

四谷はそこまで思い詰めた。

彼は周囲に心を閉ざし、心に決めて家を出ると、夏呼の家で共に暮らすようになった。

世間に背を向けた四谷は、敢えて人生の下り坂に行くようなものであった。夏呼にしても決して平安な毎日ではなかった。

夏呼は四谷と暮らすようになってからは、自分という女が四谷という一人の男の将来を駄目にするのでは、と心を痛めた。

夏呼はまた四谷の家族に心の負担を感じていた。

四谷が孤独であることを一番知っているのは夏呼であった。

四谷が家族の元へ帰れば、四谷の孤独はいつかは癒えることもあるだろう。

しかしそれでは夏呼自身が辛く、今となっては絶えられる自信はなかった。

いつそのこと彼が黙ってこのアパートから出て行ってくれたら、どんなに気が楽かとも夏呼は思った。

四谷がそばにいても夏呼もまたつらい毎日を送らなければならなかった。

新宿にマンションを借り、引っ越しをすると夏呼はお母さんと呼んで一緒に暮らしたい、と四谷に相談した。

お母さんは茨城の実家に居たときに軽い脳溢血で倒れ、市内の病院に入院していた。

夏呼は出来れば自分が世話をしたいと四谷に言った。

四谷は狭い新宿のマンションでは、身体にも何かと障るのでは、と心配したが、そこは血のつながった親子で、ほとんど寝たきりのお母さんに夏呼はさほど不自由を感じさせなかった。

夏呼の兄弟関係は父親の違う兄一人と、同じ父親の姉妹二人の四人だが、どういふ訳か兄と姉妹はお母さんの姓を名乗り、夏呼だけが父親の名字であった。

兄が生まれると父親は戦争でなくなり、お母さんは兄を連れて再婚した。

そこで女三人の子供が産まれたが、その父親に女性が出来て家を出た。

お母さんは父親と別れると、子どもたちと共に元の姓に戻ったが、夏呼だけがそのままになったと言う。

夏呼からそんな家族の秘密を明かされた日、四谷はこの小さな屋根の下に、姓の異なる三人が一家族のように暮らしているなんて、人生っておもしろいね、と言った。

四 鯨

夏が過ぎ、秋風が吹き始めたある日曜の朝のことであった。

四谷はいつものように夏呼の部屋で目を覚ました。

カーテンの隙間から差し込む陽の光からすると、昨夜来の雨も上がって外は大変良い天気のようにだ。

昨夜は夏呼から雨で車が無く、店のお客が帰れずにいて閉店が遅くなるから、と四谷に電話があった。

それでは…と彼は寢酒に水割りを一杯飲んで寝た。

今朝はいつもより大分目覚めが早かった。

気のせいか気分も爽快である。

夏呼がいつ帰ったのか、いつ眠りについたのか、彼はよく寝込んでしまつて覚えていない。

小料理屋という仕事は、たまに店が終わつた後も客の帰えりが悪いこともあり、特に雨の日は夏呼の帰りが遅くなりがちであった。

それでも土曜の夜は余程大事な客でもない限り、店を閉めて帰宅する夏呼であったが、昨夜はどうしても断れない客があつたのだろう。

そのあたりは長年のつき合いから彼も十分わかっている、決して文句を言ったことがない。

夏呼の朝は遅い。

四谷が起きてても、起きたくなければ自分から起きることはない。

客を相手に飲みたくない酒も飲む。

それも毎日飲むとなれば身体がもたない。

それだけ夏呼は十分睡眠をとる必要があった。

今朝も夏呼は横でよく眠っている。

起こすにはかわいそうな時刻である、まだ起こすまい、彼は普段ならそう思ったであろう。

だが今朝の四谷はちよつと気持ちが高ぶっていた。

夏呼を起こして、二人でどこかへ出かけた。

それもいつもの日曜日とちよつと違うことをしてみたい、そんな気分なのである。

四谷は寝起きの煙草に火をつけ、それをゆっくりと吸いながらしばらくじっとしていた。

窓下の明治通りは日曜もなく沢山の車が走っていて、鉄筋コンクリートのマンションの、しかも五階にある部屋だというのに、その絶えまない音が耳鳴りのように聞こえてくる。

もうとうに眠りから覚めてしまったし、これから寝直す気にはなれない。それにしても昼までには、まだ大分間がありそうである。

四谷は意を決し、横で背を向けて寝ている夏呼の肩をそつとゆすった。

「ううん……」

夏呼は寝返りを打ったが、目はまだ開かない。

彼は耳元で小声で言った。

「起きてハゼ釣りにでも行ってみないか」

「……」

まだ眠りから覚めないのか、それとも聞こえていないのか返事はない。

四谷は諦めかけた。

すると夏呼はパツと目を見開いた。

「ハゼ釣りって言った？」

「うん、言った」

「…… また、どうして？」

「天気もいいしね。それにお母さんに、ハゼの天ぷらでも食べさせてあげられたら、と思ってるね」

「……………」

夏呼は四谷の突飛な返事にしばらく考えた様子だが、からだを起して言った。

「お母さんにハゼの天ぷらっていいわね。でもハゼだって誰にでも釣れるわけはないでしょ」

「ハゼぐらい誰にでも釣れるだろう」

「そういえば子どもの頃に、父とハゼ釣りに行った覚えがあるわ」

夏呼も少しその気が出てきたようである。

「でもどこで釣るの？ それに道具はどうするの？」

「江戸川の放水路が釣れるって、なんかの本で見たよ。道具は適当に買えばいい」

「……………」

夏呼は起きあがってダイニングへ行き、冷蔵庫から飲み物を出して飲んでいた。

ダイニングを挟んで向こうにお母さんの寝室がある。

飲み終わってお母さんの様子を見に行ったようだ。

お母さんはすでに起きていたらしく、何やら二人は小声で話をしていた。

しばらくして玄関ドアに挟まった新聞を取る音がして、夏呼が戻ってきた。

「じゃ、起きてくださいね。行ってみましようよ」

夏呼はすっかりその気になっていた。

「よし、行こうか」

四谷は気合いを入れる格好で、腕と足を伸ばし布団から跳ね起きた。

夏呼が四畳半の部屋の片隅に布団を畳んで寄せた。

彼は布団の温もりが残る畳にどっかと座った。

「地図はなかったかな」

夏呼に地図を持って来させ、江戸川放水路がどこなのか探した。

「釣り場は行けばわかるだろう」

二人は身支度をした。

身支度と言っても普段の日曜日に買い物や散歩へ出かけている服装と変わらない。
い。

「出かけてくるわね」

夏呼は出掛けに襖越し、お母さんに一声掛けた。

二人はマンションを出て明治通りを新宿駅へ向け歩いた。

風は無く、明るい光が明治通りの路面を照らしている。

両側のビルの窓ガラスには、夏の名残りの強い光が反射して目を細めさせた。

「確か上州屋と言ったな」

四谷は新宿三丁目、伊勢丹の斜向かいに釣具屋があつたのを思い出した。

「そこによつて道具を買おう。ついでに釣り場も聞いてみようか」

釣具屋に入ると、そこにはあらゆる釣り具がところ狭しと並んでいる。

どれもカラフルでファッショナブルである。

「すごいわねえ」

夏呼は子どもの頃の釣り具のイメージと随分変わった、と感じた。

四谷はあれこれ手に取つて品定めをしていたが、結局決めたのはハゼ用と書かれたビニールの袋に、特価品の赤いラベルの貼られた竿を二本。

それと出来合いのハゼ仕掛けに錘と餌であつた。

「江戸川の放水路がいいですかね？」

四谷が店員に訊いている。

「そうですね。ボート釣りですけどね」

「ボート釣り？」

「そうです…。でも放水路なら岸から投げても釣れますよ」

「そこへはどう行けばいいですか？」

「新宿三丁目駅から都営地下鉄で九段下まで行き、東西線に乗り換えて原木中山という駅で降りるのです。そこから十分ほど歩けば、江戸川放水路に出られますよ。近くにはボート屋がいくつもありますから、行けばすぐわかります」

店員が簡単な地図を書いてくれたので、四谷は礼を言つて二人は店を出た。

「ボート釣り、ですって？」

夏呼は四谷の顔を伺うように見上げた。

「うん……。でも行つてみようよ」

江戸川は上流で旧江戸川と放水路の二つに分かれ、いずれも東京湾に流れ込む東京の代表的な川である。

川幅は放水路の方が広く、川の様子も旧江戸川に勝り、今では放水路が江戸川そのものに思われている。

放水路の両岸は土手となり、土手からは付近の貸しボート屋の簡易な栈橋が数多く川面に向けて突き出ている。

江戸川放水路はハゼのボート吊り場として有名で、シーズンには無数のボートが川面を埋めた。

店員に教えられたとおり原木中山の駅で降り、線路づたいに江戸川放水路へ向けて二人は歩いた。

道は次第に細くなり、まわりはアパートらしい建物が増えた。

途中で釣り具を携えた親子に出会った。

夏呼は、「もう帰ってくる人がいるわ。あの人たち釣れたのかしら」とつぶやくように言った。

道は突き当たりに出た。

川を跨ぐ青い水道管らしいものが見える。

放水路はもうすぐらしい。

道を左に折れると路上に駐車している車がある。

おそらく釣りに来た人たちの車であろう。

その方向へ二人は足早に歩いた。

すると小川の向こうに土手らしい小丘が見えてきた。

小丘は横一直線に長く、視界の遠く先まで続いていた。

その上を釣竿を持った人が歩いている。犬を釣れて散歩する人もいる。二人はその小丘に登った。

間違いなく土手に出た。

目の前には、江戸川放水路が広がっていた。

ここが東京だろうかと思えるほど、視界は開けていた。

水面は穏やかで、一面に釣りボートが浮いている。

土手からは粗末な木や板で出来た栈橋が川面に幾条か突き出っていて、その先にボート屋の人らしい人影が、何人か忙しそうにしていた。

登って来た道を振り返ると、先ほどは気がつかなかったが、土手沿いの道路の向こうに一軒のボート屋がある。

入口の上の羽目板には大きく『林遊船所』と書かれていた。

「まず、ボートを借りなくっちゃ」

四谷は土手を駆け下り、夏呼もそれに続いた。

「ごめんください」

「いらつしゃい」

入口に並んだガラスケースの向こうでボート屋の女将さんが挨拶をした。

「ボートを借りたいのですが」

「いくつ？」

「一艘でいいです。ところで何時までですか」

「五時までにながってください。ほかに何か？ 餌はいいですか？」

「餌は持つてきました」

「……………」

見るとガラスケースの上に牛乳の空き瓶が一本置いてあり、その中に折れた竿先が一本挿してあり、その竿先には糸、糸の先には小さな錘が小さな針とともにくっ付いている。

四谷はちよつと気にはなつたが、勘定を急いだ。

「この黄色い札を棧橋の先にいる人に渡してくださいね」

女将から黄色い札をもらつて店を出た。

腕時計を見ると十一時をちよつと回っている。

「もうこんな時間だ。でもまだ五時間は釣れるな」

「五時間も釣るの？」

夏呼はそんなにも釣るのかと戸惑つたみたいであつた。

棧橋の先には陽に焼けたボート屋の主人らしき男がいて、二人の若い男とボートの水を汲みだしたり、ボートの引き回しをしていた。

そのまわりには陸に上がる釣り客のボートが寄りついていた。

「おねがいします」

四谷は主人らしき男に丁寧に頼んだ。

「これからなさるのですか？」

「ええ」

「それなら向こう岸がいいよ」

男はボートの座を拭きながら教えてくれた。

「ありがとうございます、行ってみます」

夏呼がまずボートの後ろに座り、四谷が漕ぎ手の座に座わるとオールを握った。もともと彼はボート漕ぎが上手だった。

浜松の郊外に佐鳴湖という小さな湖があつて、子どもの頃、近所の子供たちとよく端から端までボート競争をやつたものだった。

オール捌きが上手いかどうかは、スピードや進む方向だけでなく、後ろ座席に座る者の心理にも影響するのだった。

「うまいじゃない」

「うまいだろう」

夏呼は四谷のボートに初めて乗つたのだが、意外にスムーズな漕ぎっぷりに、この先が安心と見てホツとしたようであつた。

川の中程は航路らしくボートはいない。

向こう岸と言われて四谷は流れを横切るように漕いだ。

航路を渡るとそこには数え切れないほどのボートが、舳先を川上に向けて錨を降ろしていた。

「ずいぶん来ているのねえ。女の人もいるわよ」

夏呼が驚いたように言った。

四谷はなんとか錨が降ろせる場所を探した。

「この辺りでやってみよう」

彼は舟先に向かい腰をかがめて慎重に錨を投げ入れた。

錨のロープがスルスルと水中に呑み込まれていく。

ボートは川の流れに沿って動きやがて落ちついた。

彼は錨がしっかり川底に掛かったのを確かめると向きを変え、元の座に座りなおした。

「さあ道具を貸してごらん」

「……………」

男には、全くの都会育ちでも無い限り、子どもの頃に一度や二度、釣りに通った記憶がある。

だから竿や糸、針や錘といった道具や仕掛けについても、若干なりとイメージが沸くものである。

四谷は買ったばかりの竿、それに針や糸の入ったビニールの袋を夏呼から受け取ると、慣れた手つきでそれを繋ぎ合わせた。

「さあ、出来た」

四谷は夏呼に組上がったばかりの道具を手渡した。

「器用なのね、おどろいたわ」

「こんなこと男なら誰にでも出来るさ」

「釣りの嫌いな人でも？」

「……………」

「女の人はこういうことが苦手なのよ。餌だって見ただけで気持ちが悪いでしょ。この餌、自分でつけるの？」

「慣れればどうってことないよ。どれ、貸してごらん」

そう言っつて餌のゴカイを小さく切り、夏呼の針に付けてやった。

「こうやって持って、軽く投げるんだ」

四谷も自分の道具に餌を付け終わると夏呼に教えた。

そして竿を立て仕掛けを投げ入れて見せた。

夏呼も言われたとおりにやっつてうまく投げ入れることが出来た。

「簡単だろ？ あとは釣れるのを待つだけさ…」

「……………」

四谷は釣りをするなんて何十年ぶりであった。

生まれは東京だが戦争中に浜松に疎開をしてそこで終戦を迎えた。

まだ三歳の頃だから彼にとつては故郷と言えば浜松であり、そこには浜名湖という立派な釣り場があった。

だが両親は東京の人だからあまり釣りには関心なく、子どもを釣りに連れて行くことはなかった。

それでも終戦直後の、これといった遊びのない時代だから、子ども仲間では釣りは盛んで、四谷も一時は凝ったことがあった。

子供の頃に誰もが一度は馴染んだ記憶のある釣りなのに、青春から大人になると様に止めてしまうのはなぜだろう。

やることが他にも一杯あるからだろうからか、釣りへの興味が失せてしまうのも、不思議と言えば不思議であった。

きつと人間同士の付き合いが忙しく、自然との付き合いを忘れているのかも知れない。

四谷は釣りと人間の関わりに興味を覚えた。

夏呼は海辺育ちだが、釣りにはさほど興味を覚えたことはない。

子どもの頃、一番上の兄がバケツにいっぱいイシモチを釣って帰り、自慢げに見せたこともあったが、そんなときでも自分もやってみようと思ったことはない。

釣りは男のするものと夏呼は思っていた。

夏呼は時計を見た。

今朝、四谷が突然「ハゼ釣りに行こう」と言い出してから、もうすでに四、五時間は経つたろうか。

行くと決めてから地図を探したり、道具を買ったり釣りは結構準備が大変だと夏呼は思った。

それに釣り場まで相当時間が掛かる。

都会の人には向かないのではと思った。

それにしても、もうお昼なのに、四谷のお腹は空かないのだろうか。もし、ここでトイレに行きたくなったらどうしよう。

見れば男の人はボートの上から水面に向け用足しをしている。

(釣りは女には向かないのだわ)

そんな心配が頂点に達したとき、背を向けて釣っている四谷が、夏呼の方に振り向いて言った。

「トイレに行きたくなったら言いなさい。いつでも陸に上がるから」

「まだ大丈夫よ」

「それにお腹も空いたね…」

「そうね」

やはり四谷も同じことを考えていたんだわ、と夏呼はホッとしていた。

二人はまた水面を見つめ、魚の掛かるのをじっと待ち続けた。

「釣れた！」

四谷が振り返った。

「釣れたの？」

「ううん、あなたよ」

「いや、まだだ」

「釣れないわねえ」

「ああ」

それにしてもなぜ一匹も釣れないのだろう。

もうかれこれ一時間は経っている。

周りの人を見たが、偶然向かいの人が小さいハゼを一匹釣ったのを見ただけである。

そんなはずはない。

きつとみんなは釣れているのだろう。

四谷はいささか心配になってきた。

餌が悪いのだろうか。

それとも仕掛けがまずいのか。

いや、まだ一時間だ。

時間はたつぷりある。

ここで慌てては夏呼が気にする。

第一、格好が悪い。

四谷は餌を新しいのに変え、ボートの反対側に投げ入れた。

それからまた一時間は経ったろうか。

二人の竿には相変わらず魚は掛かってこない。

夏の終わりとはいえ川面を渡る風は冷たくなった。

夏呼は散歩に着る程度のカーディガンとジーパン姿である。

身体は次第に冷え、トイレにも行きたくなってきた。

またさすがに空腹も覚えた。

夏呼は振り向いて言った。

「天ぶらは諦めましょうよ」

四谷はそのままの姿勢で不機嫌そうな声を出した。

「帰りたいの？」

「そうじゃないの……。もし一匹釣れても、天ぶらにはならないでしょ」

四谷も諦め顔を夏呼に向けた。

「そうだね」

「また来ればいいわ。今度はお弁当を持ってもっと早く来ましょうよ」

「……………」

夏呼は四谷を慰めて言った。

「まわりもあまり釣れてないみたいよ。釣れないのはあなたが悪いのではない

わ」

その言葉で納得したのか四谷は竿を立て、魚が付いていないのを最後に確認し仕掛けを取り込んだ。

「じゃ、帰ろう」

「うん」

夏呼も急いでリールを巻いた。

錨を上げた四谷は、ボートの漕ぎ座に座って何事もなかったようにスースーとオールを掻いた。

川の中程の航路を横切って、もと来た栈橋の先にボートを寄せた。

「どうでした、釣れましたか？」

主人らしき男がボートから降りる二人に手を貸して訊いた。

「いや、だめでした」

「そう、一匹も？」

「ええ、一匹も」

「……………」

男は浅黒い顔を曇らせて、「ありがとうございました。またいらしてください」と言った。

四谷も「また来ます」と答えた。

栈橋は丸太を組んで川底に挿し、その上に船の廃材を敷いた粗末な物であった。

ここからは河口が近いので、海の満干がそのまま川の水位に影響する。今は満ち潮なのか、棧橋の足元は水に浸っていた。

棧橋の幅は一人がやっと通れるほどで、四谷は夏呼の手を取り注意深く歩いた。

棧橋をもの数メートル行くと、そこに座って糸を垂れている釣り人がいた。

二人はその人の後ろを通るため、四谷が釣り人に声を掛けた。

「すみません。うしろを通ります」

「どうぞ、どうぞ」

その釣り人は四谷たちの邪魔にならぬようにと背を前にかがめた。

四谷はその気遣いに応えて通りがかりに「釣れますか？」と声を掛けた。

すると釣り人は、「よく釣れますよ」と答えた。

四谷も夏呼もハッと立ち止まり耳を疑った。

「釣れてるのですか？」

「ええ、釣れていますよ」

「……………」

二人は顔を見合わせ、その釣り人の脇にあるバケツを覗いた。

なんと、型の良いハゼが数匹泳いでいるではないか。

「これ、ここで釣ったのですか？」

夏呼が驚いたように訊いた。

「本当に釣ったんですよ。見ててご覧なさい。また釣れますから」

釣り人は二人に竿先を見るようにと言った。

竿は細くて短かった。

その細い竿先からは、糸が真っ直ぐ水面に向けてピンと張っている。釣り人は竿先をリズムミカルに上下させた。

そして、ピツという音とともに竿先を立てた。

糸の先には奇妙な形をした小さい仕掛けが付いていた。

(そうだ。さつきお店の牛乳瓶で見たのと同じ仕掛けだ)

四谷はそれに気づくと余計身を乗り出した。

針先に着いていた餌はなくなっていた。

釣り人は手早く餌を付けると再び同じ場所に仕掛けを投げ入れ、また竿先を上下させた。

しばらくしてまたピツと竿先を立てた。

仕掛けが勢い良く彼の左手に帰ってきた。

今度も魚は釣れていなかった。

付けたはずの餌もなくなっている。

釣り人はまた素早く餌を付け、同じ場所に仕掛けをそつと落とし込み、同じ動作を繰り返した。

四谷と夏呼は釣り人の動きをじつと見まもっていた。

突然釣り人は竿を大きく上に上げた。

すると今度は音もなく竿先が大きく水面にしまった。

細い竿先は糸に引かれてブルブルと震えた。

釣り人はかまわず竿を上まで立てた。

すると水面から黒っぽい魚が身を踊らせながら姿を現し、そのまま勢い良く彼の左手の中に取り込まれていった。

まぎれもなくハゼであった。

「どう、釣れたでしょう」

そう言つて釣り人はさりげなく魚を針からはずし、脇のバケツに入れた。

二人は鮮やかな彼の釣りっぷりに声さえなかつた。

（凄い人がいたもんだ。自分たちがあんなに頑張つても、小さなハゼ一匹さえ釣れないのに、この人はいとも簡単に、釣ってしまった。それも「釣れますよ」と

言っておいて、本当に釣り上げしまったのだから大したもんだ。なぜこの人にはこんなことが出来るのだろう」

四谷は不思議そうに釣り人に尋ねた。

「どうしてそんなにうまく釣れるんですか？」

すると彼は四谷たちの持ち物に目を遣って、「ちよつと仕掛けを見せてご覧なさい」

と言った。

四谷は使ったばかりの竿と、それにぶら下がっている糸や仕掛けを釣り人の前に差し出して見せた。

彼はそれを手にとって、「これでも釣れますがね」と言う。

「……………」

「では、私の道具でやってみませんか」

「えっ、私たちが、ですか？」

「そう、ここでどうぞ」

二人は顔を見合わせ、一瞬戸惑った。

「どう、やってみる？」

四谷は夏呼をうながすように訊いた。

「そうね、やってみたいわね」

釣り人はその声を聞くと立ち上がり、竿を置いてそこに夏呼を座らせた。

「いいですか。まず要領を教えましょう」

「……………」

釣り人は夏呼に竿を持たせた。

「右の手のひらで、丁度オーケストラの指揮者の指揮棒のように、竿を軽く握ってご覧下さい」

夏呼は言われるとおりに竿を握った。

「そう、その要領です。あとは私がやったように、そつとあの場所に仕掛けを入れます。私が魚を集めてありますから、魚はすぐに餌を食いに来て、ブルブルと来ます。が、そのときではもう遅いのです。その直前、竿を伝って手のひらにモノゾという感触がある。その瞬間、竿を上げるんです。そうすればきつと釣れます」

四谷も説明を聞きながら、釣り人が手に持っている仕掛けを覗き見た。

その視線を感じて釣り人が言った。

「この仕掛けは私が考えた物です。理屈はあとにしましょう。では餌を小さく切って付けてください。いいですか、こんな具合に」

夏呼は餌を付けた仕掛けを、釣り人がいう場所にそつと入れた。

四谷は釣り人が「魚を集めてある」といったことを不思議に思い訊いた。

「それは竿を上げる度に餌を切り捨てて来るんです。だから魚が集まるんです」
「なるほど。しかしそんなふうまくいくもんですか」

「馴れれば誰にでも出来ますよ」

「……………」

その時、夏呼の持っていた竿が瞬間しなった。

「来た！」と釣り人が軽く声を上げた。

当の夏呼も恐る恐る竿を立てた。釣り人の時と同じように水面が騒ぎ、バチャバチャという音とともに魚が現れた。

まさしくハゼであった。

「やったあ」

夏呼がはしゃいだ。

「やったね」

「やりましたね」

四谷も釣り人も一緒に喜んだ。

「だって重いんですもん。途中で落ちるか心配したの。モゾって何となく感じたわ。すごいでしょう」

夏呼の興奮はしばらく治まりそうもない。

四谷も興奮気味に釣り人に言った。

「お陰様で良い体験が出来ました」

「いいえ。でもよかったですね…。ところでなぜ釣りなんかに来られたんですか」

「いえね、ちよつと親孝行でもしようかと…」

そういつて四谷は照れくさそうに笑った。

夏呼も横で笑いながらうなずいた。

「ほう、それはまたなぜ？」

「この人の母が寝たきりですので、たまにはハゼの天ぷらでも食べさせてあげようと思ったのですが…」

「そうですか。よかったら私の釣ったのをお持ちなさい。このボート屋の林にもまだありますから、あとでお寄りなさい。全部お持ちになったらいい。まだ時間がありますから、もう少し釣ったらどうです？」

釣り人はそう言つてバケツのハゼをそのまま夏呼に手渡した。

「本当にいいんですか？」

夏呼は四谷の顔を見ながら釣り人に聞いた。

釣り人はいいんですよ、という素振りを繰り返して、その場を立ち去って行った。

四谷はどうして良いか分からなかった。

釣りの仕方を教えてくれたばかりか、自分が釣った魚を全部くれるという。

そんな人の良い人がこの世にいるのか、信じられないことであった。

信じるのはよそう。

そんなことは期待して裏切られてもうれしくはない。

今頂いた魚だけで十分である。

それよりも是非、あの人の釣り方を覚えたい。

夏呼も感激している。

何がそんなに違うのか。

もう一度借りた道具で試してみよう。

「夏呼、どうしようか？」

「折角だから、やりましょうよ。私、やってみたい」

「じゃ、やったらいい。僕は見ているから」

その言葉を待つかのように、夏呼は竿を取って餌を付け始めた。

それから小一時間釣ったろうか。

夏呼がさらに一匹釣り上げた。

日もだいぶ西に傾き、川向こうの土手の上には、シルエットの富士山がくつきりと見える。

夏の盛りが過ぎ、さすがに陽が落ちると冷えてくる。

二人は帰り支度を急いだ。

借りた道具を返さなければならぬ。

栈橋を渡り、足早に土手の階段を登り下りして林遊船所の戸口に立った。

中では先ほどの釣り人がボート屋の女将や主人らしき男、それに釣り客数人らと何やら話しをしている。

二人は「ごめんください」と扉を開け、店の中に入った。

「どうでした？ あれから釣れましたか？」

釣り人がすぐに訊いた。

「ええ、一匹」

夏呼が答えた。

「そう…、一匹でも立派ですよ。ここに居る人たちも今日は大して釣れてないんですから」

ドツと笑い声が上がった。

誰もが二人に笑顔を見せた。

「道具をありがとうございます」

人の良さそうな女将が二人にお茶をすすめ、主人らしき男が四谷から道具を受け取った。

「林さん。その魚をこの方に全部あげてください」

釣り人は主人らしき男に目配せをした。

その男がやはりこの店の主人であった。

主人はバケツから数十匹のハゼを全部ビニールの袋に入れ、四谷に渡した。

「本当に頂いていいのでしょうか？」

「まだ天ぷらには小さいかも知れませんが、正真正銘、江戸前のハゼだから、きつとおいしいでしょう。お母さんにぜひ喜んでもらってください」

「ありがとうございます。私は四谷と申します。先生ぜひお名前を…」

「私は”はなわ”です。土に高で塙と書きます」

「そうですか。改めてお礼に参ります。これから急いでかえって、彼女が料理をしますので…。失礼させていただきます。今日はありがとうございました」

二人は何度も頭を下げて礼をいい、店を出ると原木中山の駅へと帰り道を急いだ。

日はとうに暮れ、街灯がところどころに灯っている。

道は暗く行き交う人もない。

家々の窓の明かりも心なしに寂しそうな街である。

新宿の、あの明るいネオン街の夜に馴れきった四谷には、殊更そう感じた。

歌舞伎町からわずか一時間のところに、今日のような感動があるとは思っても寄らなかつた。

あまりにも非日常的な出来事が、四谷をして馴れきった日々から目覚めさせたようであつた。

確かに夏呼はやさしく、四谷のよい理解者である。

決して夏呼に不満があるわけではない。

だからこそ二人の関係は、大した波風もなくこうして長く続いたといえよう。

しかしそう毎日が新鮮というわけには行かない時期でもある。

二人には日常を破る何か新鮮な体験が必要である、と四谷は感じていた。

今日、突然ハゼ釣りに行こうなどと自分から言い出したのも、そんな気持ちの一つの現れかも知れない。

夏呼もきつとそう感じているに違いない。

それにしてもあの釣り人の優しさはどこから来るのだろうか。

良く釣れる方法を見つけたら、自分だけのものにして、決して人に教えたがらない、それが人情ではないだろうか。

まして自分が釣った魚を他人に全部あげてしまう優しさを、もし自分であつたら持ち合わせているだろうか。

夏呼は夏呼で、再びあの釣れた時の感動を思い出していた。

あのモゾつという感触は、これまで我が身が経験したことのない真新しい感触であつた。

自然の生き物の生命が、細い糸を介して手に伝わる。

それが釣りの魅力だとしたら、これまで抱いていたイメージとはだいぶ違つていた。

一度の体験ぐらいで分かつたようなことはいえないが、釣りへの入口が何となく見えたような気がする。

しかしまあ二人とも食事もせず、よくも夢中になれたものである。

さぞ、お母さんもお腹を空かしているだろう。

夜まで家をあけたことのない二人だから、きつと心配しているに違いない。

さて、今日という日を、なんとお母さんに話そうか…。

あれやこれやと、夏呼が思いを巡らしているうちに、電車は新宿三丁目に着いた。

「あなた、先に帰ってちょうだい。わたし伊勢丹にちよつと寄って買い物をして行くわ。野菜も無いし、ほかの天ぷらの種もいるでしょ」

「僕も行くか…」

「いいわよ。そうそうビールだけは忘れないでね」

家でお酒を飲まない主義の夏呼も、今日だけは一緒に飲みたいらしい。

四谷は夏呼が伊勢丹に入るのを見送って、夏呼のマンションへと明治通りを急いだ。

「ただいま…」

玄関を開けると入ってすぐのダイニングで、お母さんがテーブルに座りテレビを見ていた。

「お帰りなさい。遅かったわね。夏呼は？」

「ちよつと買い物に…」

「そう、楽しかった？ 釣りに行くって言ってたけど、どうだったの？」

「ええ、夏呼がお話しするでしょ。それより今日はハゼの天ぷらですよ」

「じゃ、釣れたんですね」

「ええ…」

夏呼がほどなく帰ってきた。

「ごめんね、遅くなっちゃって。お腹すいたでしょう。約束通りハゼの天ぷらよ。あなた、お話しした？」

「いや、まだ何も」

四谷は隣の部屋で着替えをしながら答えた。

夏呼は前掛けをして料理の準備を始めた。

「そう、じゃ、あとでゆっくりお話しします。見て見て、すごいでしょ、このハゼ」

夏呼はお母さんに、ビニール袋のまま魚を見せた。

「あら、まだ生きているじゃない。こんなにも沢山、これ、あなたたちが釣ったの？」

「ううん、釣ったのは二匹だけ。あとはいただいたのよ」

「いただいたって、誰に？」

「知らない人よ」

「知らない人？ またどうして」

四谷が着替えを終えたと部屋から出てきて言った。

「お母さんに食べさせたいと言ったらくださったんですよ。ねえ、夏呼」

「そうなの。またずいぶん親切な人がいたもんだねえ」

「でしよ」

夏呼はお母さんに笑顔で応じて、「さ、話はあと、あと。すぐ支度するわ」と言う
うと、魚を持って台所に入り料理を始めた。

夏呼は小料理屋をするぐらいだから、魚を扱うのは馴れたもので、生きたハゼを
三枚に下ろすなどは苦もない。

四谷はそんな夏呼を台所で見ては、「うまいもんだ」といつも感心する。

料理の味付けにしても、店ではお客相手だから誰の口にも合うようにする。

四谷と暮らすようになってからは、家では四谷の好みに味を合わせてくれる。

夏呼自身の好みが四谷と似ていて、特にそうしているわけではないと言うが、プ
ロの味を独り占めできる気分は満更でもなかった。

商売柄、料理についても夏呼なりの哲学を持っていて、四谷がうなずけることも多々あった。

ある時、釣り好きな客が、釣った魚を食べない、というのを夏呼が耳にしてこんなことを言っていた。

「どんな魚も、釣ったらおいしく食べてあげる。それが魚に対する供養というものではありませんの」

へらブナ釣りなど若干例外はあるもの、釣りと料理は切って切れない関係にあり、釣った魚は料理されるのが普通である。

釣った人が料理をせず、さりとて家族にも捌けるものがないとなれば、ご近所や友人にお裾分けと称してもらってもらうことになる。

もらう方もありがた迷惑の場合もあり、そんな時の魚もいい迷惑である。だから釣った魚は釣った人が少なくとも捌いて、あとは料理さえすれば良いというのが一番良いのだが。

また夏呼の場合、「これ、私が釣りましたの」と店のお客に出すこともできるから、釣れすぎた時でも処分に困るなどということもない。

客もきつと喜こんでくれるだろうから、まさに魚冥利に尽きるわけである。この点を加味すれば、夏呼は良い釣り人になれる資格があると言える。

「さあ出来たわよ。お待ちどうさま」

夏呼の料理が終わり、大きなお皿に白い紙を敷き、その上一杯に揚げたてのハゼが乗せられて出てきた。

「わああ、おいしそうだ」

「おいしそうねえ」

四谷とお母さんと口をそろえて言った。

「ご苦労さん、さあビールだ」

夏呼のグラスにビールを注ぎながら、「お母さん、どうぞ、暖かいうちに」と四谷がハゼの天ぷらを勧めた。

この日の食卓はいつになく賑やかで、笑い声が夜遅くまで続いた。

四谷はその夜、昼間の出来事を考えて多少興奮していたのか、いつまでも寝つかなかった。

彼は久しぶりに人の優しさに触れた思いがしていた。

たかが釣りかもしれない。

ハゼをいただいたただけの話かもしれない。

だが四谷にはなぜかこれまでにない新鮮な人の優しさを感じていた。

思えば四谷はここ数年、ビジネスの世界に浸りきり、人の優しさというものを考えたことがなかった。

人というものは元来利己的なのであって、自分も例外ではなくそうなのだと思うことも多くなった。

夏呼も寝付けずにいた。

「何を考えているの？」と夏呼が訊いた。

「いや、何も」

「ご家族のこと？」

「……………」

「私だったら大丈夫よ。一人で生きられるから」

夏呼がか細い声で言った。

「いや、違う。会社のことだ」

「会社でまた何か有ったの？」

「何もないよ」

夏呼は四谷が友人や知人から新会社の話を持ち込まれて迷っているのを知っていた。

昨年の夏、四谷はこれまでのソフト会社に加えインテリジェントビルの研究開発会社を設立した。

それを知った友人や知人が、ぜひ自分も会社を作りたいので共同経営者になって欲しい、と彼に頼んでいた。

夏呼は四谷の仕事に口出しはしないが、内心、止めたらいいのにな、と思っっていた。

夏呼の客にも社長業の人は沢山いるが、皆、自分で苦勞して会社を興している。会社というものは苦勞があるからこそ社長業も身に付くのではないだろうか。

「社長仲間が増えることは、良き理解者が増えることで、僕の人生に新しい時代が開けるかも知れない」と四谷は言っていたが、これ以上もう会社など作らずとも、四谷はそれで良いではないか。

友人や知人に自分の力を貸すことも、四谷は人間として当然と考えているようだが、彼が共同経営者に名を連ねれば、責任の大半はきつと彼に向けられることになる。

銀行から資金を借り入れたり、出資者を募ったりするのも彼がしなければならぬ。

ましてや新会社のすべてが順調に発展するわけではない。

それも何社ともなると人材や営業、資金と様々な問題があるはずで、四谷がまた負担になる。

四谷は会社さえ上手く行ってくれるなら、彼の方から深入りするつもりはない、と言っているが、もし何か起きた時は、すべて自分で責任を負わなければならない。

夏呼は素人ながら四谷のことを心配していた。

「ねえ、あなた」

夏呼が小声で言った。

「……………」

耳を澄ますと四谷の静かな寝息が聞こえている。

夏呼はそれを聞いて、いつしか眠りへと落ちていった。

五 埴塾

何やかやとあった一週間が過ぎ、再び土曜日を迎えた。

夏呼が店に出る支度をしていると、四谷が夕方仕事を終えて帰って来た。

「あら、今日はお早いお帰りね」

きものの帯を結びながら、立ち鏡の中から夏呼が言った。

「うん、でも六時だよ。あーお腹が空いた」

「今日は五目寿司なの。お店のお客さんで五目寿司の好きな方がいて、その方が今日四、五人でいらっしやるって、お昼に電話があつたの。土曜日でしょ。お客さんが少ない日だから、少しはサービスしなくちゃ来ていただけなくなっちゃうものね」

店が休みの日以外は、二人が夕食を一緒にすることは無い。

必ず夏呼はお母さんと夕食をし、四谷の分は別に用意をしてから店に出るようにしている。

四谷は帰るとまずテーブルの上の夏呼のメッセージに目を通す。

そこには、帰ったら店に電話が欲しい、などの伝言のほか、食事の暖め方や食べ方が書いてある。

四谷はそれを見る度に、出がけの忙しいときに作ってくれる夏呼の気持ちがあるのが難く感じられた。

夫婦でもないのに、といじらしくさえ思う。

一人でする食事はどんな旨い物でも美味しいものではないが、夏呼の想いの入った料理だけはそれなりにおいしく、四谷はそんな暮らしに不満はなかった。

今日も夏呼とお母さんは食事を済ませているので、四谷は着替えをし、テーブルに座った。

いつものようにメッセージの小さな紙が置いてある。

夏呼の五目寿司は四谷も好きだし、夏呼もそれを良く知っていて、時たま作ることもある。

そこには、今日はなぜ五目寿司になったか、そのわけと、食べるとき吸物を温めることなど細かく指示した後、最後に1行「明日、釣りにいかない？」とあった。

「うん なに？ 釣り？」

四谷は五目寿司を口にしながら言った。

「そう、明日……」

「……………」

「駄目なの？」

「いや、いいけど。またハゼかい？」

四谷はお母さんの顔を見たが、にっこりして二人の会話を楽しむように聞いている。

「もう一度釣ってみたいわ。あの感触が忘れられないんだもん」
きものを着終えた夏呼は、もう夏呼ではない。

まさしく店のママである。

自然とママの仕草になりきれる。

ママが客に甘えるような、そんな甘え顔をして四谷に寄り添い、その肩に手を置いた。

「おいおい」

「あら、おいやですか」

夏呼はさらに四谷の膝に座ろうとする。

四谷はお母さんの手前も考えるが、夏呼は一向に気にしない様子である。

「おいおい、悪ふざけはやめろよ」

お母さんは、二人のしぐさが余程おかしかったのか、笑いながら言った。

「あなたと夏呼は本当にお似合いね。夫婦ならいいのにね」

二人はそれを聞いてふざけるのを止め、互いに顔を見合わせた。

お母さんが普段二人が夫婦でないことを気遣っていると、四谷は夏呼から聞いていた。

二人ともこの話になると多少気ままずくなるのを知っている。

夏呼がすぐ話を逸らした。

「で、釣りにには行きますか？」

「先週のお礼も言いたいのね」

「じゃ、決めたわね。今夜帰ってきたらお弁当を作るわ。明日は早く行きましょよ」

夏呼はそう言い残すと、玄関へ行つて白い草履に履き変えた。

「行つてらっしゃい」

お母さんがいつものように夏呼の背中声で声を掛けた。

「行つて来ます。きょうは早く帰つてくるわね」

「ああ…」

四谷も夏呼の出がけを見送った。

翌朝、目覚まし時計が6時を告げた。

夏呼は起きあがつてカーテンを軽く引いた。

「うあー、いいお天気。釣り日和だわ」

四谷は眠い目をこすった。

「そうか、釣りに行くんだったね」

「そうよ。これからお弁当作るから、まだ寝ててもいいわよ」

「いや、起きる。準備をしなくっちゃ」

準備といっても何もすることは無い。

先週買った道具一そろいと、着る物ぐらいである。

着る物には先週で懲りている。

今日はちよつと厚手の物が良さそうだ。

それに日除けの帽子もソフト会社そうだが、ゴルフのものでいいだろう。

夏呼のもあったつけ。

餌はボート屋で買ったほうがいい。

魚が一番好きな奴をボート屋は知っているだろうからな。

そうそう、あの人に何かお礼をしなくちゃ。

「夏呼、先日の方の方に、何かお礼をしなくてもいいのかい」

夏呼が台所で返事をした。

「いいと思うわ。ご好意はお受けしたら…。それよりもあの方の釣り方を学ぶこ

との方が、きつと喜んでもらえると思うわ」

「……………」

準備が出来て、夏呼はお母さんの寝ている部屋に入った。

「行つて来るわよ。今夜もハゼの天ぷらよ」
夏呼の小さな声とともに、「ああ行つておいで。気を付けるんだよ」というお母さんの声が聞こえた。

江戸川の放水路に着いたのは、それから一時間ほど経った八時頃で、太陽はすでに土手の上にあがっていた。

先週と違つて今朝は多くの釣り人が土手を上り下りしているのが見える。

二人はまず『林遊船所』へと向かった。

店の入口は釣り客で溢れ、中を覗くこともできないほどである。

「魚がそんなに沢山いるのかしら」

夏呼がビックリした様子でつぶやいた。

女将が、息子らしい男の子に手伝わせて、忙しくボート客を捌いている。

ようやく四谷たちの番になった。

「先日はお世話になりました」

四谷が女将に挨拶した。

「あら、いらつしやい。今日はお早いですね」

「ええ。ボートと餌、お願いします。ところで女将さん、このあいだのあの方、いらしてます？」

「埴先生でしょ。奥にいらしてますよ。中へどうぞ」

二人は店の奥を見た。

釣り人が数人いて思い思いに座を囲み、お茶を飲みながら釣り談義をしている。

その中に背を向けた一人の釣り人がいる。

後ろ姿からも確かに先週会った人だと分かる。

二人はその人の方に近づいて行った。

するとその気配でか、その人も振り返って二人を見た。

「やあ、このあいだのご夫婦ですね。どうでした、ハゼの天ぷらは？」

「先週は本当にありがとうございます。おかげさまで母も大喜びで…。良い親

孝行が出来ました」

「そうでしたか。それはよかったです。それで今日もハゼの天ぷらを」

そういつて彼はその場の人々を笑わせた。

「さあ、どうぞお茶でも」

皆が席を二人に空けてくれた。

「実は先生にもう少し釣り方を教えていただけないかと思ひまして」

四谷は夏呼の気持ちを代弁するかのようになり、夏呼の方を見ながら言った。

「いいですよ。ここに居る人はみんな私の生徒ですから」

「生徒？」

「ええ、弟子とは申しません。良い釣り仲間ですから。私の釣り方をお教えしたということ、生徒なんです」

すると、その場に居る年輩の釣り客の一人が、

「わたしたち塙塾の塾生なんです。あまり出来の良くない生徒なんですがね」といつ、皆をドツと笑わせた。

四谷と夏呼はその場の雰囲気親しみを覚えた。

「そうでしたか。出来れば私たちも塾生にしたいだけませんか」
塙さんに四谷が頼んだ。

「どうぞどうぞ、どなたでもなれますから。今日からでもいいですよ」

四谷はうれしくなって夏呼を見た。

夏呼も笑っていて、その様子から不満はなさそうである。

しかし四谷は内心戸惑った。

塾生だなんておこがましくはないか。

ただちよつと釣り方を教えていただければそれで良かったのではないか。

この先ずっと釣りをする保証もない。

たとえ自分はいいとしても夏呼は女である。

どこまで釣りを続ける覚悟があるのか、それさえわかりはしない。

相手に迷惑を掛けて終わるのが関の山である。

だったら今のうちに、前言を取り消した方が良くはないか…。

「さあ、釣ってくるか」

塾生と名乗る釣り客たちは、立ち上がって釣り場へと出かけて行った。

最後に埴さんと四谷たち二人がその場に残った。

埴さんも立ち上がって何やら準備を始めた。

四谷はそれを見ながらまた別のことを思った。

そういえば夏呼は、先週のあの釣れた時の感触がどうしても忘れられないと後から何度も言っていた。

あんなことを口にするからには、余程大きな感動があったに違いない。

女にしては珍しいが、女だからといって釣りの喜びが分からないとは言えない。

彼女はひよっとすると釣りが好きになるかも知れない。

どうやら今は成り行きに任せて、様子を見たほうがよさそうである。

「じゃあ、この仕掛けから始めましょうか」

塙さんが用意していたのは、先週も二人が見たあの奇妙な仕掛けであった。

「これ、前にお話したとおり、わたしが考えた仕掛けです。実は、わたしも昔はみなさんと同じような仕掛けを使っていたんですが、どういう訳かハゼを釣り逃がすことが多い。なぜだろうと考えたんです。それで水槽に海水を張り、生きたハゼを泳がせて何度も実験を試みたくて、するとハゼという奴は、餌を口にくわえて、それを離すときにブルツと頭を振る。つまりブルツと来たときには、ハゼはもう餌を離して逃げているんですね。これでは釣れないのが当たり前でしょう」

二人は真剣に塙さんの話に聞き入った。

「では、どういう時に竿をあげたらいいのか。それはハゼが餌を食べたときですよね。ところがこれまでの仕掛けですとこの時がわからない、つまり竿から手に、ハゼが餌を口にする瞬間が伝わってこないのです。そこでハゼの奴がパクリと餌を口にくわえた瞬間、竿から手に伝わる仕掛け。それがこいつなんです」

塙さんは、仕掛けを左手の指でぶら下げ、右手でハゼが餌を食べる格好をした。

「いいですか。こうしてハゼが餌を口に入れるんですが、ハゼという魚の目は少し上に付いていて、水中にちよつと浮き気味の餌が食べ易いです。つまり口に入

れた瞬間、ハゼの体重が掛かり、針に微妙な信号が発生し、糸から竿、竿から手へと伝わるというわけです」

その時夏呼が、分かったわ、という顔つきで言った。

「あのモゾツとした感触がそれなんです」

「そうなんですよ」

「では、竿も…」

「そうなんです。竿も大切なんです。ですからわたしは微妙な当たりを手に伝えられる溪流竿を使っているんです」

そういつて、小さく仕舞い込まれた竿を手にして二人に見せた。

四谷は塙さんの話を聞き、釣りとはこんなに科学的なものなのかと感心していた。

ハゼという魚を徹底して観察し、その結果からあの仕掛けが生まれたという。

ならばハゼに限らず、どんな魚にでも同じことが当てはまるのではないか。

塙さんはまずわたしたちに、研究心の大切さから教えようとされたに違いない。

しかしそれにしても、これほどまでの技術であれば、釣り師にとってまさに秘技中の秘技ではないか。

それを惜しげもなく人に教えてしまうなんて、この方は一体どんな考えをしているのだろうか。

先週は自分の魚を惜しげもなく下さった。

今日はきょうでハゼ釣りの秘伝を明かしてくれる。

その優しさはどこから来るのか。

これもきつと釣り師の心得を教えているに違いない。

四谷は良い方に巡り会えたと感謝した。

「先生、わたしたちにも是非、竿をお世話いただけませんか」

「いいですよ。来週までにお二人の分をご用意しましょう」

「ありがとうございます。ところで先生はいつもこのボート屋に来られるんですか」

「ええ、ちよつと縁がありましたね」

「縁と、申されますと……」

「実は、わたしは報知新聞社のAPCをやっているんです」

「APCって、確かアングラー・ペン・クラブの略でしたね」

「そうです。ときどき新聞に記事を書いているんですが。数年前、やはりここ江戸川放水路のハゼ釣りを取材したことがあります。その日あいにく取材が長引い

て、原稿締切に間に合いそうもなく、公衆電話をさがしたのですが見つからず、このボート屋で電話をお借りして事なきを得ました。その時この店の主人がころよく電話を貸して下さった。それがご縁でハゼ釣りにはこの店に来るようになりました」

「そうでしたか。わたしたちも何かのご縁で…」

「そうですね…。ご夫婦の生徒さんは初めてですよ」

客捌きに一段落した女将がお茶を出しに来た。

女将も人の良さそうな笑顔を、夏呼と四谷の二人に向けた。

その日の釣りは、埴先生の指導で始まった。

すでに釣り客のボートが川面を埋めている。

陽が斜めに登り、日差しが大分強まっていた。

四谷たちは先生のボートの脇に錨を降ろした。

仕掛けと竿は夏呼が先生のものを、四谷はボート屋の主人のものをお借りした。

「いいですか」

先生が二人を見て声を掛けた。

「こんな姿勢で…。姿勢も大事で、これならあまり疲れませんし、魚の取り込みにも具合がいいですから」

先生は背筋をぴっと伸ばし、水面を真っ直ぐ見据えている。

四谷も夏呼も先生を見習った。

「餌はさつきお話ししたように、小さすぎず、大きすぎず。餌はこまめに取り替えましょう。魚だって新鮮な餌が良いに決まっていますからね」

なるほど、すべてが自然の理にかなっているというわけか。

四谷は先生の言葉の一つ一つを聞き漏らすまいと思った。

先生は仕掛けだ、竿だ、餌だと分けて考えていない。

全体が一つになって働いたとき良い釣りが出来る、そう教えているようにも思えた。

先生に続いて二人の糸も真っ直ぐ水面に垂れた。

先週はあれだけ餌付けをいやがっていた夏呼が、いまは黙々と一人で釣っている。

大した変わりようだと四谷は苦笑した。

きつとあのモゾツという感触を、夏呼は息を殺して待っているに違いない。

四谷もその瞬間を待った。

「来たっ」

そのとき先生の右手に持つ竿が一瞬しなつたかと思うと、型の良いハゼが左手に飛び込んだ。

夏呼の竿もしなつた。

四谷にも来た。

「やった。先生、第1号です」

「やりましたねえ」

三人の竿は休まず動いた。

埜先生の秘技は、確実な形で夏呼と四谷に伝わったのであった。

陽が西に傾く頃には、四谷と夏呼のバケツは、泳ぐハゼで一杯になった。

無論、埜先生は数えられないほどの魚を釣って、早々と陸に上がっていった。

「そろそろ上がろうか」

四谷が背を向けて釣っている夏呼に言った。

「いま何時？」

「もう四時だよ」

「もうそんなになるの」

「随分釣れたろう」

「そうね、もう十分ね」

「はじめてだよ、こんなに釣ったの」

二人は興奮した面もちで顔を見合わせた。

四谷は錨を上げた。

するとさつきまで気がつかなかったが、夏呼の前にボートが三艘もいて、夏呼の方を向いた格好で誰もが釣り糸を垂れている。

「夏呼、あの人たち、そこに魚が沢山いると思ったのかも知れないね」

確かに女性があんまり釣ると、そう思いたくもなるだろう。

四谷は改めて塙先生の技に感じ入りながら、棧橋に向けてボートを漕いだ。

「どうでした、釣れました？」

ボートが棧橋に着くと、ボート屋の主人が真っ先に訊いた。

「釣れましたよ。見て下さい、こんなに」

二人はバケツを主人に見せた。

主人はバケツを覗いてビックリした様子で、「へえ、一週間前はおでこだったお二人がねえ」と笑った。

ボートを先に降りた親子連れのお客が戻って来て、やはりバケツを覗いた。

「随分釣れましたね。わたしたちなんか一日でたったこれだけですよ。どの辺りですか」

そういつて川面の方を見遣った。

「お客さん、場所じゃないですよ、場所じゃ」

ボート屋の主人が、四谷たちに代わって答えた。

親子連れはげんな顔で夏呼たちを見て、立ち去っていった。

「先生がまだおられますよ。行ってお見せなさい。きっと喜ばれますよ」

主人の言葉を聞いて二人は重いバケツをさげ、栈橋を渡った。

店では塙先生が釣り人数人と釣り談義をしていた。

そこへ二人がバケツを持ち込んだ。

「大したもんだ」

先生が目をむいた。

「なんてつたつて、今日一日でこれだけやるんだから」

まわりの釣り人も一斉にバケツの中を覗いた。

「先生のおかげです」

四谷が満面笑みで礼をいった。

「こちらのお二人は、今日から私の生徒ですから」

そういつて先生は、皆に二人を紹介した。

「これ、失礼ですが、奥さんは何匹ぐらい？」

釣り客の一人が夏呼に訊いた。

奥さんと言われて夏呼が戸惑いながら、「よく分かりませんが…」と四谷の顔を見た。

「約半分ぐらいが彼女なのでしょうか」

その後を四谷が代わりに答えた。

「それはすごい。先生、これからが楽しみな生徒さんですね」

釣り客はそういつて埴先生を見た。

先生も満更でないといった顔で、何度もうなづいていた。

それからしばし林遊船所は、おんな釣り師・夏呼の誕生で話に花が咲いた。

六 一人舟

それからは大雨でもない限り、夏呼と四谷は日曜日になると江戸川放水路へとハゼ釣りに出かけた。

四谷にしてみれば、たまにはゴルフにも行きたいが、ボートもろくに漕げない夏呼を一人で遣るにはあまりに可哀想であった。

ところが今度の日曜だけはどうしても断れないゴルフコンペである。

夏呼にそのことを話した。

「いつてらっしゃいよ、たまのゴルフでしょ」

「……………」

「わたしは大丈夫よ、一人で行けるから」

「一人って、おまえ本当に行く気か」

「ええ、一度ひとりでやってみたいなって思っていたの。だっていつもあなたと一緒に、いつまでも一人前とはいえないでしょ。ボートだって漕げると思うわ。それに塙先生やお仲間がいるでしょ。心配ないから…」

「……………」

その日の朝が来た。

四谷は夏呼より早く起きて友達と待ち合わせをし、車で沼津のゴルフ場へと向かった。

天気はゴルフ日和となったが、風が若干吹いている。

陸でこれほどなら、海に近い江戸川の放水路ではもっと強かろう。

ボートは風に弱いので、四谷は夏呼のことが気に掛かった。

ゴルフが終わると、クラブハウスの公衆電話から林遊船所に電話を入れた。

「ハイ、林です」

女将のいつもの声が返ってきた。

「もしもし、四谷です」

「あら、四谷さん……。奥さんがいらしてますよ。いまどちらで？」

「ええ、わたしはきょうはゴルフなんです。それで彼女の様子はどうですか？

そちらは風は？」

「風は午前中は吹きましたけど、いまは大分おさまってます。奥さんの様子ですか……。ちよつと待って下さい。いま塙先生に代わりますから」

女将が電話口で、四谷からの電話であること、奥さんの様子を知りたいことなどを塙先生に告げていた。

すると、「ハロー、ハロー」という先生の元気な声が電話口から返ってきた。

「こんにちは、四谷です」

「やあ、やあ、きょうはゴルフなんですってね」

「そうなんです」

「それでいまはどちらなんですか？」

「まだ沼津なんです」

「沼津…。それはまた遠いなあ」

「ところで彼女はどうですか。きょうは一人で、先生にご迷惑ではなかったでしょうか」

「いえいえ、どうしてどうして、立派なものですよ。迷惑なんてちつとも」

「それならいいんですが…」

「驚きましたよ。ボートもひとりで漕いでますよ」

「……………」

「いやね、奥さん、きょうは一人で来ましたというから、それならわたしが一緒にしましょうか、と言ったら、いいんです、ひとりでやってみたいんです、と言っ
じやありませんか」

「……………」

「風もあるし、わたし内心は、大丈夫かな、と思ったんです。まあ、そばにいて何かあれば手助けしよう、と思いましてね」

「ありがとうございます。で、どうでした？」

「それがなんと、下手な男より上手いじゃないですか。大したもんです。もうボート釣りは合格ですな」

埴先生はそう言つて電話口で大きな声で笑つた。

「それで彼女は釣れているんですか」

「釣れてます、釣れてます。上手くなつたもんです。まわりのお客さん、あきれ顔で見えていますよ」

「そうですか。先生のおかげです。本当にありがとうございます」

「いえいえ…、失礼だがあの人には才能がある、女にしておくには惜しいぐらいだ」

そういつて先生はうれしそうに笑つた。

「もうすぐ上がつてくると思いますよ。ご心配なく…。電話があつたことをお伝えしておきますよ」

「恐縮です。来週はわたしも伺いますから」

「お待ちしています。お二人にはそろそろ冬のハゼの釣り方をお教えした方がよさそうだ」

「冬のハゼと申しますと？」

「ハゼはこれから冬に掛けて釣り方が変わるんです」

「そうでしたか。それは楽しみですね。では来週に…」

そう言っつて四谷は電話を切った。

帰りの車では、ゴルフのことなどすっかり忘れて、夏呼のことを考えていた。

先生の話によれば、夏呼のことは全く心配なさそうだった。

しかし何が夏呼を、ああまで釣りに夢中にさせたのだろう。

確かに四谷も釣りが嫌いではないが、一人で行きたいとまでは思わない。

しかも夏呼は女である。

女でも釣りの好きな人はいくらでもいるだろうが、一人で行くという人はまず少ないだろう。

とすると夏呼は異常なまでに釣り感覚の発達した女ということになる。

いままではその感覚が眠っていただけで、塙先生との出逢いがあったって突然それが目覚めたのだろうか。

車は東名高速道路を横浜辺りを走っているようだ。

もうすっかり陽が落ち、前をゆく車の赤いテールライトが帯のようにつながっている。

日曜日も行楽地からの帰りの車でよく混む。

この先はどうやら渋滞らしい。

時間からすれば、夏呼はもう新宿のマンションに帰り着いた頃である。

(今夜もハゼの天ぷらか…)

ゴルフで心地よく疲れた身体をシートに横たえながら、四谷は夏呼の台所姿を思い浮かべていた。

七 行き詰まり

四谷のソフト事業は、順調に拡大していった。

彼はまだソフトウェアという商品が単独で市場を作るには時期が早いと判断し、パソコンと一体となったソフト＋ハードの製品を世に出した。

その頃のパソコン用メモリーは高価で、漢字フォントはまだ世に無いため、ソフト用にみずから漢字を作るなど工夫をした。

お客に見てもらうため、ソフト＋ハードを乗せた改造車「ソフトバンカー」を開発し、客先に出かけてセールスする仕組みを考案し、全国にフランチャイズシステムで普及させた。

晴海で開かれるビジネスショーの会場にソフトバンクを送り込み、関係者の度肝を抜いたのもこの頃である。

本社がある渋谷の道玄坂のビルの一階に我が国初のパソコンスクールを開き、マスコミを驚かせた。

また女性のインストラクター制度をはじめたり、彼のアイデアは確実に事業化され、全国に支店、営業所、フランチャイズ店を展開するなどして成功していったのである。

一方では米国のラスベガスで毎年開催されるコンピュータショーにも単身出かけ、最新のトレンドを学んでは新製品に反映させた。

会社が生産するビジネスソフトのすべてを自ら企画し、時にプログラミングを行い、建設業のみならずビジネス全般のパッケージソフトを開発して市場に投入した。

電子ミュージックや人型ロボットの研究も次世代を睨んでの社長の決断であり、社員を育てることに熱心だった。

しかし、ベンチャー事業は多額の資金が必要である。一時社員の数は100名を超え、その家族を考えれば300人もの人が彼の経営に頼って暮している。資金繰りも次第に容易ではなくなってきた。

大手資本の経営参加後は株式上場の夢は消え、経営が管理され、次第にサラリーマン企業と化していった。

ベンチャーは最後までベンチャーでなければならぬ。

巨大企業の力を借りれば、その時から経営者も社員も意識は低下し始める。

四谷がそのことに気が付いたときは、すでに手遅れとなっていた。

大手資本から派遣された役員は金のことしか考えなくなり、資金のパイプは細くなるばかりである。

プロパーな役員も次第に魂を抜かれ、大手資本の言いなりにさえなっていた。

そんな中でも、建築専門家として彼にはどうしてもやりたいことがあった。

それがインテリジェントビルと建築家ロボットを使ったデジタル建築の研究開発であった。

アメリカのハートフォードへ行き世界初のスマートビルを見学したり、ロンドンのインテリジェントビル国際会議にも出席して、来るべき建設業の革命を予見し、新聞の建設情報革命をコラム連載、本にもなった。

またインテリジェントビルの建設に向け、新会社も設立した。

その最中に、バブル経済が破たんし、四谷の経営は一気に苦境に立たされるのである。

八 船出

ハゼのボート釣りの季節が終わると日増しに寒さが増した。

新宿の花園神社が一の酉、二の酉と賑わいを見せたかと思うと、その年も駆け足で過ぎ去り、新しい年を迎えた。

暮れは店も忙しく、夏呼も釣りに行きたいと口にすることもなかったが、年が明け、ハゼの甘露煮やおせち料理に飽きると、「新鮮な魚を食べたくない。ねえ、お母さん」などと母娘は話をし、暗に釣りに行きたいと四谷にねだった。

埴先生には二人ともハゼは免許皆伝と言われ、また来年ハゼの季節になるまで、何も釣るものが無いのは寂しいだろうから、これからは是非カレイやキスを覚えるようにと勧められていた。

貸しボートのシーズンが終わった林遊船所は、例年乗合い船を出しているというので、それに乗って江戸川放水路を下がり、東京湾へ出てカレイやキスを釣るのだと言う。

さすがの夏呼も船釣りと聞いて躊躇したようで、昨年のうちはずぐに船に乗るとは言わなかったが、「塙先生にお電話したらどうかしら」と今となつてはその氣であつた。

そんなわけで年明け早々の日曜日、四谷と夏呼の二人は塙先生の指導で東京湾のカレイ釣りに挑戦することになった。

夏場、ボートで賑わつた江戸川放水路の棧橋を、林遊船所の主人が舵を取る小型釣り船が、朝八時きっかりに塙先生と四谷たち二人、ほかに馴染み客十数人を乗せて船出をした。

放水路を下がると東京湾に出て、浦安の海岸沿いから一気に羽田沖へ向けて船は走つていく。

波は穏やかだが、冬の重装備に身を固めた四谷たちは、それでも引き波のしぶきと風を避けるように、船の後部で身体を寄せ合つた。

身を切るような冷たい風に当たつて、早くも顔を赤らめた夏呼と四谷に塙先生が言つた。

「きつとお二人は船にやつて来ると思つていましたよ」

「はあ、彼女が少し心配なんです、ただただ美味しいカレイが食べたい一心で参りました」

「そうですか。誰しも食欲には勝てませんな」

三人は大声を上げて笑った。

四谷と夏呼は東京湾から東京や千葉神奈川を見るのは初めてであった。

それは三百六十度のパノラマであった。

こうしてみると東京湾は広い海である。

物の本には東京湾には八十種類ほどの魚がいると書いて有った。

四谷も夏呼も身近にこんな豊かな自然があるなんて、釣りをするまでは考えてもみなかった。

二人は今更ながら塙先生に感謝するのであった。

船が釣り場につくと、もうすでに沢山の釣り船が錨を降ろしている。

船長の合図で釣り人たちは一斉に仕掛けを海に投じた。

「仕掛けも釣り方も冬のハゼとほとんど同じですから、もう要領はお解りでしょうが、私がやるのをご覧になってみて下さい。まず餌ですがこのように大きめに付けて……………」

塙先生はいつものように丁寧二人を指導した。

「投げ入れたら糸のふけを取って五分ほどそのままにして置きます。合わせるときには勢い良く竿を立てる。カレイがいなければ手前にそのまましておきます。」

もしカレイがいれば、ズーンと重くなりますから、それからゆつくりとたぐりま
す。魚が水面まで来て大きいようでしたら、タモですくいましょう。ではいいです
か？ 始めましょう」

先生に続いて二人も仕掛けを投げ入れ、じっと待った。

二人は待つ間がとても長く感じられてきた。

何とわくわくさせる釣りなんだろうか。

船中あちらこちらの竿が上がって、型の良いカレイが取り込まれ、歓声が上がつ
た。

夏呼が立てた竿が大きくなつた。

「来たわ」

夏呼が叫んだ

「おお、ママに来ましたね」

横で塙先生が声をかけた。

「水中を左右前後に動くのは間違ひなくカレイです。そうそう、そのままゆつ
りと巻き上げて。おお、これは大きいぞ。船長、タモをお願いします」

白と黒のカレイの魚体が水中で舞った。

船長が長い柄のついたタモ網を水面に差し出しすと、それを慎重に水面ですく上げた。

「わあ、やったわ」

夏呼は興奮している。

四谷もまわりの釣り人たちも一斉に拍手を送った。

「女性の竿に来るなんて、このカレイはきつと雄だぞ」

船長が物差しで大きさを測りながら、「三十八センチもある」と言った。

「おう、これは立派だ。ママおめでとう。今夜のお刺身が出来ましたね。さあ今度のご主人、唐揚げサイズのを釣りますか」

埴先生が皆を笑わせた。

「それにしてもハゼ一匹釣れなかったあの二人が、こんなに上手くなるなんてねえ」と埴先生は至って満足な様子で二人を見つめた。

その日、家に帰り着くと夏呼は、「ねえ、見てみて、お母さん。これ、私が釣ったのよ」と真っ先にお母さんに見せた。

するとお母さんは信じられないといった顔で、「夏呼が釣ったって？ うそでしょ。ねえ四谷さん、魚屋さんで買ってきたのでしょ」と言った。

「いや、本当に夏呼が釣ったんですよ」

四谷も夏呼とお母さんの会話を聞いて、本当に釣りを始めて良かったなと思つた。

二人はこうして日曜になると東京湾へ出て、冬はカレイを、春になると鶴見の岸壁でメバルやアジを、初夏には金田湾にキスを、夏の盛りは江戸川放水路でハゼ、時には富津でマダコを、秋にはやはり金田湾へイイダコをと、季節季節の魚を追つて釣りを続けるようになった。

九 入院

その夏は例年になく暑い日が続いたが、秋の風が吹き始める頃、夏の疲れからか、お母さんの身体が目に見えて衰え始め、日々床に伏す時間が長くなって行つた。

そのお母さんの容態が急に悪化し、練馬にある救急病院に運ばれたが意識が戻らず、その年の十一月にこの世を去つた。

葬儀は茨城の実家近くのお寺でしめやかに行われたが、四谷はその日、夏呼の夫として葬儀に参列した。

お母さんが亡くなってからは、夏呼は喪に服して釣りをしようとはしなかった。翌年も夏がめぐり、そろそろハゼにでも行こうか、と四谷が夏呼を釣りに誘おうとした矢先に、今度は四谷が風邪を拗らせた。

「風邪をひくなんて、気持ちや弛んでいる証拠なんだ。俺なんてもう数年、ひいておらんぞ」などと人に自慢していた彼だが、それもひとたび風邪にかかると、軽くても一週間は身体がぐずつくことになり、それだけ事業に支障があることを知って、日頃から気をつけていたからだだった。

「どうやら夏風邪にやられたらしい」

「お医者さんに診てもらった方がいいんじゃない」
夏呼が心配した。

「このまま治る風邪では無さそうだな」
観念したように彼はソフト会社がある渋谷のビルの五階の診療所に行って看てもらうことにした。

これまでさほど大した病気をしたことのない四谷だけに、主治医と言える医者はないが、同じビルということもあって社員が良く厄介になっていたので、彼も身体に支障があれば、この診療所の大沼先生を訪ねることにしていた。

この日、大沼先生は四谷の顔を見るなり、「風邪だろう」と言っただけで診察をしてくれたが、「大したことはないだろう。それより、たまに來たんだ。血液でも調べておこうか」と看護婦に採血を指示した。

翌日も翌翌日も四谷の風邪は治る気配もなく、彼は外出先から大沼先生に電話をした。

すると先生は電話口に出るなり、「おう、君を捜していたところだ。よかった。まだ生きているな」と言う。

彼はびっくりして、「生きていますよ。どうしたんですか先生？」と聞き返した。

「どうもこうも無い。すぐにいらっしやい。入院だ」

「入院？」

「急性肝炎だった。それも生きてるのが不思議なぐらいの数値だ」

「ええ？ 先生、冗談はやめて下さい」

「こら、冗談でこんな事が言えるか」

四谷は耳を疑ったが、先生が珍しく怒ったので、やっと真剣に受けとめることが出来た。

「新宿のJ R総合病院に手続きをとっておいだ。今すぐ家に帰って、入院の準備をし、わたしのところにいらつしやい。今、紹介状を書いている。わかったね？」

「わかりました。そうします…」

四谷が大沼先生のところへ行くと、先生はすぐに検査結果を出して、「これを見てご覧なさい。いいかね、このGOT、GPTというのが肝炎の数値だが、健康人なら30程度が君のは700を越えているんだ。まあ、良かった。血液検査をしなかつたら肝炎がわからずに、君は死んでいたかも知れん。これも天の助けと思いなさい」と言われる。

四谷は、「先生のおかげです。ありがとうございます」と言ったものの、四谷は自分が肝炎だなんて信じられない話で、それよりも友人知人と創った会社のことを思うと入院などはしてはいただけないと思った。

「でもなんとか入院せずに済みますか？」

「だめだ、これはドクターストップだ。そんなことをしたら本当に死んでしまうぞ」

「……………そうですか。それで、入院は何日ぐらいですか」

「まあ、二週間ぐらいだろう。新宿のJ R病院は僕も良く知っているところだし、それに部屋もいい。外はこの暑さだ。ホテルに行ったつもりで身体を休めて来なさい。君の人生もこれできつと変わるかも知れんな」

大沼先生は意味不明な言葉を最後に言われた。

しかし四谷は後日この入院が彼の重大転機になろうとは、まだ知る由もなかった。

その日の夕方、四谷からは夏呼に入院することになった、と知らせてきた。

入院となるとやはり四谷は家族に知らせるだろう。

そうすれば彼の身の回りの世話は奥さんがすることになる。

今までが元気な四谷であったから、まさか入院騒ぎが起きるとは思っていなかった。

こうなってみると妻でない自分が惨めにさえ思えてきた。

四谷からはまた電話があり、そのままJ R病院に行き入院手続きを済ませたと言ってきた。

夏呼には仕事があるだろうから来なくてもいい、と四谷は言った。

夜になって入院の知らせを聞いた四谷の家族や社員の何人かが、着替えや花をもつて見舞いに訪れた。

夏呼は翌日朝早く、人目を避けて病院へ行った。

しかしその時すでに四谷は病院の厳しい監視下にあつて、誰一人面会は許されなかつた。

四谷の絶対安静は二週間以上も続いた。

その後ようやく回復の兆しが見え始めたが、完治までは三カ月はかかると医者と言つた。

その頃であつた。

四谷が友人知人と共同で作つた会社の一つがバブル病に冒され、役員たちは密かに四谷の名義で無数の手形を振り出していた。

四谷が一ヶ月半の闘病を終えて退院した時には、すでに数十億円にも登る巨額な手形が振り出され、四谷といえどもなす術がなく会社は倒産した。

退院後安静を要すると言われた四谷だが、そんなことは言つていられない。

四谷は倒産の影響があつてはいけないとソフト会社の経営からも身を引くことにした。

九 買収

ソフト会社はすでに経営の実権をカネで握っていた大手資本が買収した。創業以来役員をしていた松岡専務や実弟の取締役はもはや四谷社長の味方ではなかった。

四谷は大手資本との日頃の付き合いの中で、薄々こうなることを予感していた。四谷社長退任の日、大手資本から派遣されていた副社長の幸田がいみじくも言った。

「社長、危機管理が出来ていませんでしたね」

四谷はこの言葉に大手資本の本音を知った思いがした。

「いずれ創業時の建築ベンチャー魂などどうでもよくなる時が来る。大手資本はカネと社長を追い出したあとの会社さえ手に入ればそれで満足なのだろう」

その異常な社長業にピリオドを打つ時が来たが、一つだけ自分を褒めてあげたかった事があった。

それは立つ鳥跡を濁さず、だった。

100名を越す社員とその家族が路頭に迷うことなく暮らしていけるなら、自分が生きた甲斐が多少ともあろうというものだ。

そう言い聞かせて住み慣れた渋谷のオフィスを後にした。

まさに天国から地獄への転落であった。

ベンチャービジネスマン四谷の栄光と挫折は、人間の厳しさと優しさとが織りなす、再演されることのない人生劇であった。

そして夏呼も又、青春の輝きの中で知り合ったばかりに、一人の悲運な男と運命を共にして薄幸な女になった。

四谷が会社を手放したことを埴先生に告げた。

すると先生はこう言われた。

「地球には陸と海があるでしょ。残念ながら人間の多くは、陸しか見えていないんですよ。それが釣りをすると不思議なことに海が見えるようになる。四谷さん、あなたもそろそろ海がみえるでしょ」

「それというのは未知の世界が見える、ということ？」

「そう、あなたの経験が必ず役に立つ時がきます。今は、会社を失って悔しく辛いでしようが、やり直しができるお歳だ。私もあなたのような生徒さんがいて誇り

です。いつも自慢しているのですよ。人に見えない新しい世界を発見してください。期待しています」

しかし四谷はもう日本の社会でやり直しの出来る男ではなくなっていた。

彼は夏呼とも別れ、コンピュータのH A Lを連れ、一人外国へ行って暮らそうと決意する。

外国への旅立ちを前にして、四谷と夏呼の二人は金田湾へ最後の釣りに出掛けた。

一艘のボートに乗り、並んで釣り糸を垂れていると、四谷は夏呼にそつと言った。

「お前に何も残してやれなくなつたね」
すると夏呼が首を横に振った。

「うーん、そんなことないわ。あなたは釣りを残してくれたじゃない」

「釣り？」

「そう、釣りよ。わたしね、将来どうやって一人で生きていこうかって、ずっと前から思っていたの。もし、あなたの事業があのまま成功していたら、あなたはき

つといつかは奥さんやお子さんの元に帰っていくでしょう。その時のことを考えると、わたしもつらかったわ」

「……………」

「だから釣りを覚えて良かった。あなたが外国に行ってしまったても、こうして釣りをして魚や海とお話しているとちつとも寂しくないもの」

「……………」

「わたしはあなたの船宿ね。歳をとってまた日本へ帰って来たくなったら、素泊まりでもいいわ、わたしのところに戻っていらっしやい。こうして一緒に釣りをしましょう」

「夏呼…」

追悼

埜先生はのちに、不慮の交通事故でお亡くなりになりました。

生前のご厚情に深く感謝し、謹んでご冥福を御祈り申し上げます。

完